

< こういう記録 >

「記憶の手ざわり：世界をつなぎとめるために」
Artist Café Fukuoka（福岡）、2026年3月20日-4月12日

写真：長野聡史





本作は、明治期の開拓移民として福岡から札幌市福移地区へ移住した人々について調べることから始まった。そこから、北海道の近代と福岡の近代を並行して見ていくことを一つの軸としてリサーチを進めた。

札幌市福移地区は、石狩川流域の泥炭湿地に位置し、かつては洪水が多発していた地域である。人々は長い年月をかけて治水や土地改良を行いながら暮らしてきた。一方で、この地域は土砂の埋立地や産業廃棄物処分場として利用もされており、現在湿地環境を守るための保全活動も続けられている。

福岡では、近代以降の福岡城と、北海道と共通の産業、炭鉱に関する事柄を主な対象とし、それらに関わる場所を訪れながら資料を収集した。福岡城を起点に幕末から明治へと移り変わる時代をたどりながら、福岡から札幌へ移住した人々の足跡を手がかりに、北海道と福岡、それぞれの近代の歴史を並行して見ていった。そして、それぞれの歴史は炭鉱という共通項によって結ばれた。

活動の過程ではオープンスタジオを行い、収集した資料を公開するとともに、段ボールなどの素材とあわせて来場者が自由に利用できる場を設けた。資料は絵を描くための素材として使われ、スタジオの中には、資料や記録、工作素材、落書き、段ボールで作られた家などが混在する状況が生まれた。当初、この試みは、人々が私のスタジオで自由に過ごしながらか、資料や記録、歴史の意味を別の使い方によってずらしたり変化させたりするところで終わるものだと考えていた。

しかし、参加者が制作したものや変化していくスタジオの状況を前にして、私自身もまた筆で形を描き、段ボールを切るなど、手を動かして制作を行うようになった。長らく離れていた「手を動かしてつくる」という行為を、参加者に導かれるようなかたちで再び行ったことは、単に資料や記録を他者に委ねることとは異なり、自らがもう一度歴史や記録に出会い直す経験でもあった。こうしたプロセスを経て、記録や歴史がインスタレーションとして風景のように立ち上がった。

オープンスタジオの様子



<移住の子>

<そして、これらはコレクションになった>

<よそから来た人>



展示風景

このページおよび次のページ

展示風景：「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」森美術館（東京）2022-2023年

撮影：木奥恵三／画像提供：森美術館

Installation view: Roppongi Crossing 2022: Coming & Going, Mori Art Museum, Tokyo, 2022-2023

Photo: Kioku Keizo / Photo courtesy: Mori Art Museum, Tokyo

「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」

森美術館(東京) 2022年12月1日-2023年3月16日



<移住の子>2019- 映像、キルト、写真ほか
明治の北海道開拓について、西欧からの影響や、内国植民地の歴史など



ページ左：
 <そうして、これらはコレクションになった>
 2016-2022 衣装、ドローイングと封筒、アンプロタイプ

架空の民族の博物館コレクション。19世紀末から20世紀初めにかけて北海道で収集され西欧に渡ったアイヌコレクションを調べたことがもとになっている。



ページ右：
 <よそから来た人>2016-2022 衣装、鶏卵紙、除雪用スコップ
 架空のポートレート。明治開拓期北海道へ入植者として。衣装やスコップなどと共に展示

<アート館ってどんな場所ですか？>

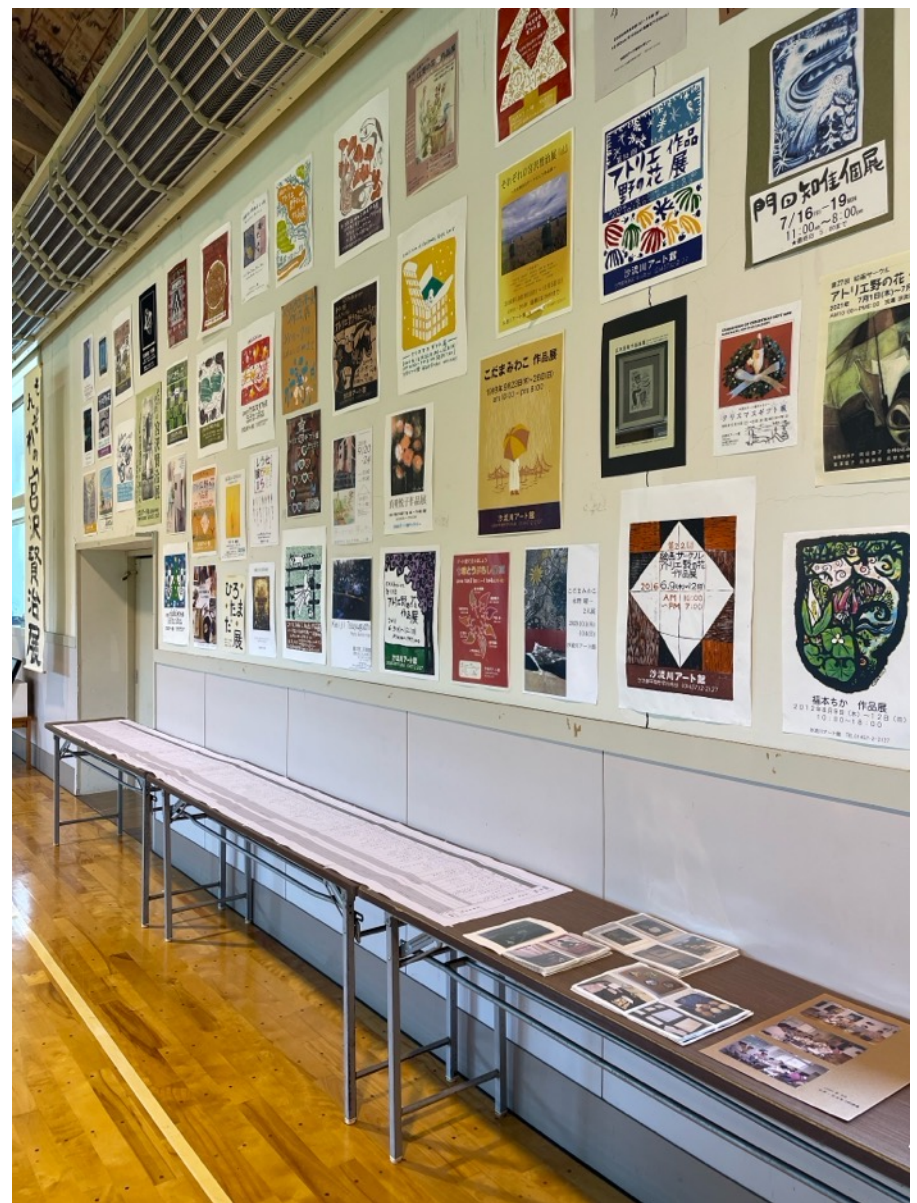
2022年6月



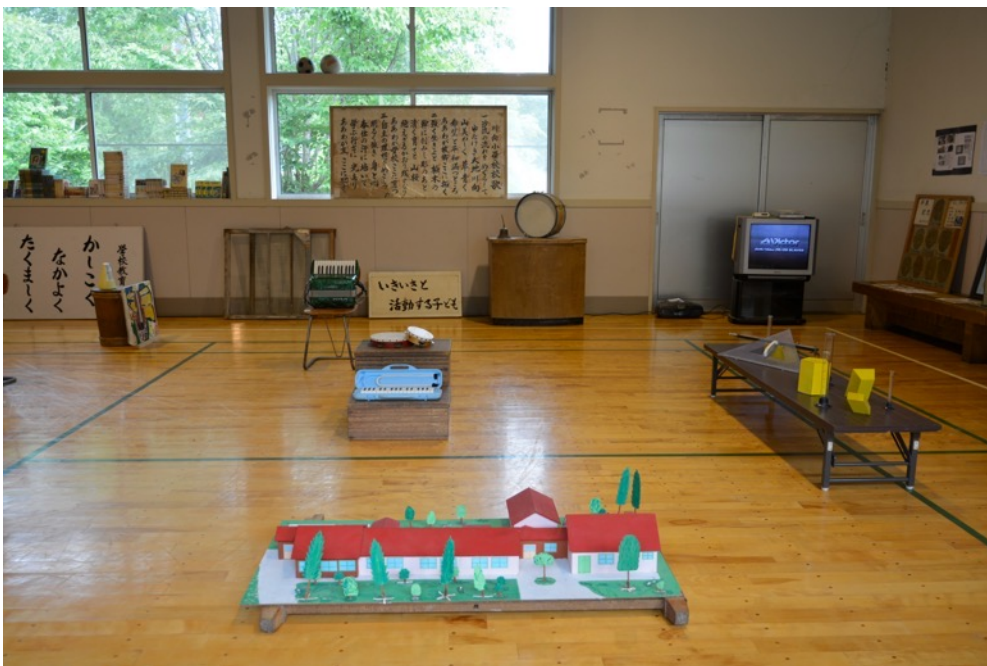
ここはある地域のアートセンターとして30年ほど活動を続けている場所。そのさまざまな機能、さらにはその歴史や地域との関わりなど、施設を中心とした地域のエコシステムに興味を持ち、2021年からリサーチを行った。そのまとめとして展示を行い、この施設のいくつかの役割（アトリエ、絵画教室、ギャラリー、地域の歴史）に焦点を当てて会場を構成し、さらにはそれぞれの役割が相互に影響し合っていることに注目した。



絵画教室：90年代初めから続く絵画サークルの活動。描かれるモチーフは施設の小学校時代のものや町の人々からの寄贈されたものなど



展覧会：アートセンターになってから開催された様々な展覧会のポスター。展覧会や歴代のアトリエ入居者なども年表にまとめた。



旧学校時代：この施設は廃校の小学校の施設を使っている。小学校時代のさまざまな備品、卒業作品、小学校時代のビデオも。

<過去をたどる家>

「昨日の名残 明日の気配」札幌芸術の森美術館、2023年1月28日-3月12日

2010年頃から制作してきた様々な作品を組み合わせたインスタレーション。特に布を使った作品を多く含む。布を使った作品の多くは、裁縫が得意な祖母と共に制作された。素材は家にあった様々な布を用い、身近なものをモチーフにしているほか、北海道近隣に見られる伝統の手芸や民族衣装をヒントに制作されている。家の形を模した構造物の中と外に作品が配置されている。私にとって裁縫を通じ祖母とともに制作する日常と地域の歴史文化を調べて作品化することは地続きであり、その中で何を背負っているのかを考えてきた。この展示をした時、北海道の歴史が私の中に根付いたように感じ、作品の完成とは5年10年と長い年月かけてできるものなのかもしれないと思った。



祖母はあるもので何とか工夫し服や着物を作ってきた。そうした背景から作品の多くは家にあった端切れや着なくなった服でできている。またこの展示では空間を仕切る壁面も何度も再利用されてきた壁板に手を加えず使っている。



<I collect bicycle parts for the same reason I like these assembled handmade tools and objects >

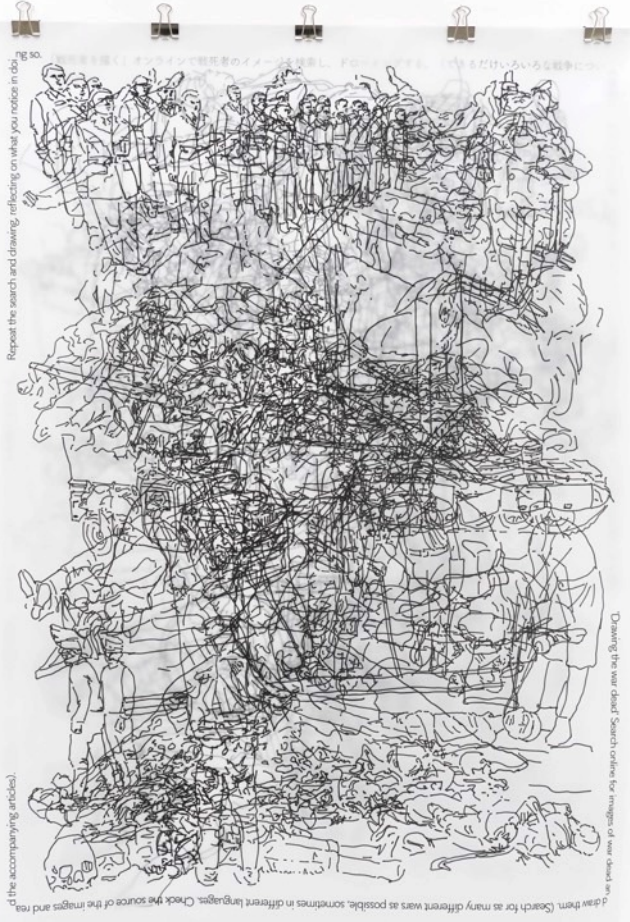
TOROY HOUSE LONDON、2022年12月 – 2023年7月

イギリス、トロイハウスでのレジデンス期間中、第二次世界大戦の記憶と遺産を現代の視点から探求した。このテーマに興味を持ち始めたのは、2019年にベトナムとマレーシアでのリサーチと活動がきっかけだった。第二次対戦中の東南アジアではそこに暮らす人々と西欧列強の植民地だったこと、また日本の侵略が重なり複雑な状況だった。各地で英連邦軍戦没者や各国・地域の市民戦没者の墓地や華人犠牲者の墓地、日本兵の墓地など戦争に関わる墓地やメモリアルを訪れ、戦没の記憶・記録のされ方も場所によって違い、それぞれの慰霊が互いに交わっていないことが印象に残った。

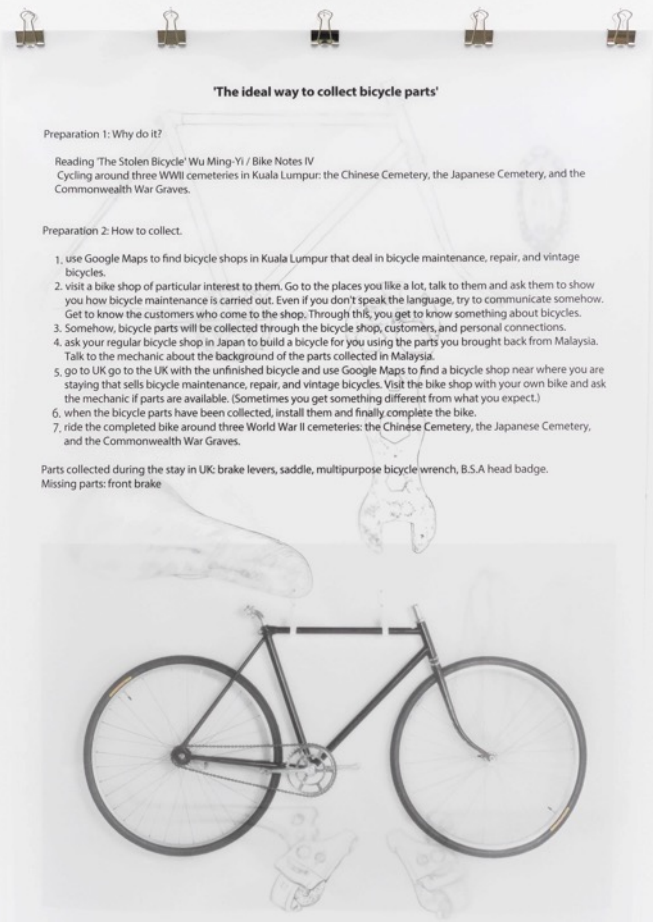
また、マレーシアでは、日本軍がマレー半島での移動手段として自転車を使用していたことを知り、自転車でクアラルンプール市内のそれぞれの慰霊碑を巡るツアーを行った。さらに、現地で自転車のパーツを集め始め、日本とイギリスでも続けた。地元の人々と自転車の部品を交換し、色々な自転車の話を聞きながら、最終的に一台の自転車が組み上がった。そうすることで、交わらない慰霊を自転車で繋ぐことを試みた。

一方で自転車が持つDIY的な精神やクリティカルマスをはじめとした社会運動とのつながりは、展示会の展示物や什器に反映された。レジデンス施設にある材料で簡易に作られた、台や脚立を展示台とし、また自転車のパーツや工具なども展示された。各地で行った戦争にまつわるツアー、自転車のパーツを集めたストーリー、各地の慰霊碑を巡った話などは、ポスターやハンドアウトのような形にまとめ展示した。





<戦死者を描く>2022 594mm × 841mm コピー用紙、トレーシングペーパー
レジデンス期間中、オンラインで戦死者のイメージを検索し、日々ドロッキングする。それらを重ねて1つにまとめている。



<自転車のパーツを集める理想的な方法>2022 594mm × 841mm、コピー用紙、トレーシングペーパー

マレーシア、日本、イギリスにて自転車のパーツを集めて一台の自転車を組み上げる、そのプロセスと手に入れたパーツのドロッキング、組み上げ途中の自転車のイメージ。(マレーシアにて太平洋戦争中日本軍がマレー半島を占領した際に自転車で移動した。また、当時マレー半島がイギリスの植民地だった)

<背景を交換する>

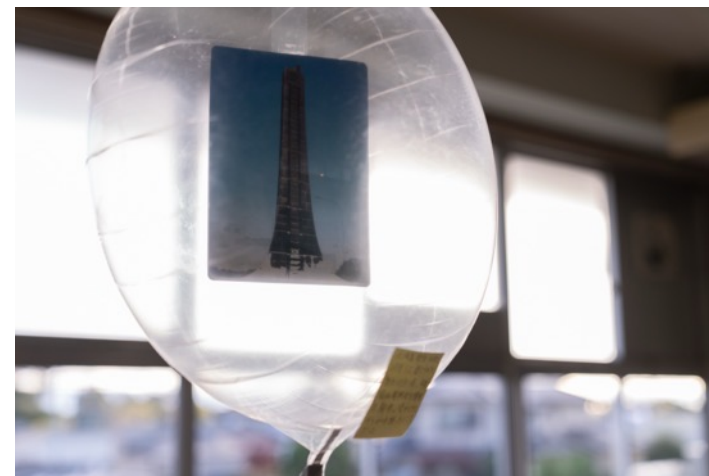
2023年11月23日－26日、Arcus Studio（守谷）
展示撮影：丸尾隆一、そのほか戸外の写真は作家本人による



作品のことや北海道のことを話している時なんだか通じないと感じたり、話すことに躊躇したりすることがある。一方で知らない地域のこと、誰かの背景について話しているとき、相手の状況に想像が及ばず失礼な態度や言葉が出てしまう時がある。そうした経験から他者との相互理解について考える試みとして「背景を交換する」活動を行った。この地域に暮らす3名の参加者と個別に生い立ちなどを互いに話した。この交換と参加者の一人と地域を歩いたことをきっかけとして、私の中で互いに知らない参加者たちが暮らす地域の風景が3人が共有してきた環境として立体的に捉えられるように感じられた。そこで、彼らが話していたこの地域の風景を実際に見て歩いた、時に参加者と共に、時に参加者の家を訪れたりしながら。それは私から相手への理解さらには背景にある地域への理解を促した。一方で活動を通じ参加者から私に対する理解を期待することや、それを強要することはできないと感じた。展示は歩いた場所の地図、参加者と話した音源、一緒に訪れた時の様子の写真やメモなどで構成されている。



左：1つ目のテーブル
下：テーブルの地図とメモの部分



上：バルーンの中に「百年記念塔」の写真が入っている。この塔は札幌の1970年北海道開拓百年記念し建てられ、2023年に解体された。唯一私の背景を紹介する物として歩くときに持って歩いた。



展示は3つのテーブルで構成され、それぞれのテーブルが個々の参加者に関する。それぞれに大きな地図が置いてあり、それは私が参加者と歩いたり、話の中で出てきた場所だったりする。地図には歩いた場所や参加者と話したこと、歩く準備のメモ、歩いた時の写真などがある。また、私と参加者がお互いの背景を交換した時の音声やこの活動こと、参加者のことなども紹介している。



水彩画に描かれたあたりを歩いてみた。

2つ目のテーブル、この参加者はこれまでさまざまな場所に移り住んできた。そして暮らしている地域の「なんでもない風景」を水彩画で30年描いている。季節や時期を置いて同じ場を描くこともある。



<石狩川から水を運ぶ>

第7回昌原彫刻ビエンナーレ2024「silent apple」
昌原市（Chongwon）、2024年9月27日～11月10日



2021年に北海道江別市で行われた「石狩川から水を運ぶ」ワークショップは厳寒の冬に北海道を代表する石狩川から水を運んでくるだけのシンプルな行為だった。凍った石狩川の上に立ち、穴を開けて水を汲み上げ、タンクに川の水を詰めて運ぶ。コロナ禍、この一風変わった活動への参加者はたった2名だった。石狩川の治水の歴史は、土地の開発と植民地化の歴史とは切り離せない。またに現在、こうして人工的に制御された川のインフラ無くして人間の暮らしは立ちいかない。こうした背景を活動と共に見つめようとした。展示では、この活動のアーカイブ写真に、川の成り立ちや変遷、石狩川の治水の歴史に関わるテキストやワークショップを紹介する新聞記事、古い石狩川の様子を写すアンティークハガキなどによって構成し、ワークショップから新たに、展示を立ち上げることを試みた。



